

解題と考察



『東海道名所図会』と生活絵引

福田 アジオ

1 名所図会の流行

『東海道名所図会』は寛政9年（1797）に刊行され、ベストセラーになった名所案内書である。これが編纂され、刊行されるには前史があった。

安永9年（1780）に『都名所図会』5巻が刊行された。作者は秋里籬島で、絵は竹原春朝斎、出版元は京都の吉野屋為八であった。京都の市中と郊外の名所旧跡を案内する地誌であるが、それまでの各種案内書と異なり、多くの挿絵が挿入されていた。それまでの案内書に入れられた挿絵は稚拙かつ粗雑であり、具体的なイメージを描くことは困難なものであった。『都名所図会』に挿入された挿絵は原則として見開き2ページに描かれており、一枚一枚が大きく、詳細であり、やや高い地点からパノラマ風に描くことが多く、あたかもその場にいるかのような臨場感を与えるものであった。しかも挿絵の数は多く、数ページに1枚の割合で挿入されていた。案内の文章と挿絵が等しい位置づけであったといえる。

観光地ともいべき名所旧跡案内の書物はすでに近世前期から刊行されていた。京都に関する案内書としては明暦4年（1658）刊行の『京童』である。もっぱら京都市中の名所旧跡を取り上げ、挿絵も入れ、人々に京都案内をしていて、多くの人々に受け入れられた。同様に、江戸の案内書も刊行された。しかし、その挿絵は稚拙で簡単であり、対象をイメージさせる力は弱かった。それに対して、『都名所図会』は大きく異なった。そのことを作者自ら巻頭の「凡例」で以下のようにわざわざ断っている。

一、図中に境地広大なるところは究めて細画なり、狭少なる神祠・小堂はまたしからず、故に図毎に人物あり、形容いたつて微少なる人物は、そ

の地広大とするべし、形容微少ならざるは境地狭少なり、譬へば加茂社と野宮との境地を知らすの便なり

一、図中の間に人物の大画あり、四時の佳観を賞して遊楽の地を知らせんためなり、洛東の花見、宇治蚩狩等なり

このように凡例で図について説明しているように、図会は詳細な絵を挿入するところに特色があった。しかも風景だけでなく、風景の中に必ず人物が描きこまれ、しかも人々の動きが、大きく、詳細に描かれているものも少なくなかった。その絵を見て、実際に現地を訪れば、そこには絵に描かれた風景や状況が存在することが確認できた。行楽や旅の案内書として、現代であれば写真が多用されるが、それに相当する役割を果たしたのが豊富な挿絵であったといえよう。

『都名所図会』は評判となり、ベストセラーとなった。天明7年（1786）には『拾遺都名所図会』が刊行された。『都名所図会』の一種の改訂版ともいえるが、全体として挿入された図が、対象に迫って大きく描く傾向があり、それだけ詳細なものとなっている。またそれまでの名所旧跡という通念で把握される場所だけでなく、祭礼や年中行事も挿絵として描いており、より人々の生活への関心が強くなっているといえよう。

名所図会という言葉は、『三才図会』、『和漢三才図会』からヒントを得て、作者秋里籬島によって書名に採用されたものと思われる。中国の『三才図会』もそうであるが、正徳2年（1713）に刊行された寺島良安の『和漢三才図会』は絵入りの辞書である。取り上げたほとんどすべての事項に具体的な絵を添えている。しかし、それは辞書であることから、単

語に対して一つの事物を単体で描くものであった。それを事物単体でなく、関連する事物を配して全体的関連を示そうとした挿絵を多く挿入した『日本山海名物図会』が半世紀ほど後の宝暦4年(1754)に出されて、図会のイメージは新しいものとなったといえる。絵を見てイメージを膨らませ、対象を理解するというのが次第に一般化してきたと考えてもよいであろう。

そのような動きを決定づけたのが『都名所図会』である。大いに売れ、版を重ね、また増補版ともいうべき拾遺まで出された。そして名所図会の時代が始まった。多くの名所図会が編纂され、刊行された。その主要なものを列記すれば以下ようになる。

- 『大和名所図会』秋里籬島 寛政3年(1791)
- 『住吉名所図会』秋里籬島 寛政6年(1794)
- 『和泉名所図会』秋里籬島 寛政8年(1796)
- 『摂津名勝図会』秋里籬島 寛政8年(1796)・寛政10年(1798)
- 『伊勢参宮名所図会』著者不詳 寛政9年(1797)
- 『近江名所図会』秋里籬島・秦石田 寛政9年(1797)
- 『東海道名所図会』秋里籬島 寛政9年(1797)
- 『河内名所図会』秋里籬島 享和元年(1801)
- 『久波奈名所図会』長円寺義同 享和2年(1802)
- 『木曾路名所図会』秋里籬島 文化2年(1805)
- 『紀伊国名所図会』高市志友他 文化8年(1811)
- 『江戸名所図会』斎藤月岑 天保5年(1834)
- 『尾張名所図会』深田正韶 天保15年(1844)

名所図会という編纂方式を開発した秋里籬島は京都から始めて、大和、和泉、摂津、近江と畿内各地の名所図会を立て続けに編纂した。いずれも特定地域の名所旧跡を記述し、豊富な挿絵を挿入したものである。それらはどれもベストセラーになったようであるが、さらに新しい構想を得て編纂したのが寛政9年(1797)刊行の『伊勢参宮名所図会』と『東海道名所図会』であった。一定範囲の地域ではなく、出発地から目的地までのコースに沿って、旅の途次に立ちより見物するための名所旧跡を紹介する案内書であった。この新機軸の名所図会はまた大いに評判となり、多くの読者を獲得した。

2 『東海道名所図会』の内容

『東海道名所図会』全6巻は寛政9年(1797)に刊行された。作者は秋里籬島、版元は京都の田中庄兵衛他であった。京都を出発して、東海道を下って江戸にいたる道筋の名所旧跡や有名な寺社を取り上げ、その地の説明をすると共に、重要と思われる場所については挿絵を挿入して、具体的なイメージを読者に与えようとしている。挿絵は全部で200点に及ぶ。6巻の構成は、巻1が京都から膳所まで、巻2は石山寺から尾張阿波手まで、巻3は宮から袋井まで、巻4は遠州秋葉から富士川まで、巻5は吉原から平塚、そして巻6が江の島から江戸までとなっている。著者は京都に住む人間であり、出版したのも京都の書肆である。必然的に京都に近い近畿地方から東海地方にかけての記述が詳細で、京都から遠ざかると次第に簡単になる。京都から遠いから記述が少なくなるのではなく、名歌に歌われる場所が少なく、また歴史的イベントのあったところも少ないという事情によるものであろう。購読者がまた上方の人々であろうと予想されたことも関係しているであろう。東海道の全部を秋里籬島自ら踏査して、場所を確認し、関連する記事を古典からも豊富に引用して、具体的に書き記している。その知識は相当程度深いものがあったと言ってよいであろう。

著者の秋里籬島は名所図会という方式の案内書・地誌を開拓し、定着させた人物であるが、その伝記について詳細に記述できる材料を持っていない。京都に住み、読本を書き、また俳人でもあったという。生没年や出身は不明である(竹村俊則『秋里籬島と『都名所図会』』『日本名所風俗図会』8、1981)。しかし、住所や生年を暗示する記事を自ら書いている。彼の一連の名所図会の最後の著書になるとされる『木曾路名所図会』(1805)の巻1に「洛の南。風すさふ賀茂の流れのすゑ宣風坊の橋のほとりなる。河原院塩竈てふ古跡籬島の庵に年久しく住て」と記して、京都の河原院塩竈近くの籬島に居住することを明らかにしている。この場所については、『都名所図会』巻2(市古夏生・鈴木健一校訂『都名所図会』1、1999)で河原院の旧跡を説明し、そこに「いま

五条橋の南、鴨川・高瀬川の間には森あり。これを籬の森といふ。河原院の遺跡なり」と注記している。現在の京都市下京区の五条大橋西側を南側に下った所と推定できる。そして、同じく『木曾路名所図会』で「よはひは古稀に近づきて鬢の霜厚く眼は春の夜の朧となりても(中略)とし享和二のとしの夏卯花月中の六日といふ日に旅立ちぬ」とも記しており、享和2年(1802)に70歳近くになっていたことが分かる。逆算すれば、1730年代の生まれということになろう。没年も不明であるが、最後の作品と考えられる『秋里随筆』が文化7年(1810)に刊行されているので、その後しばらくして没したものと思われる。名前の籬島は、住んでいた場所が籬島で、それにちなんで号を籬島としたようである。名前は仁左衛門、号は秋里籬島、籬島軒、俳号は斑竹だったという(鈴木健一「秋里籬島・竹原春朝斎略伝」市古夏生・鈴木健一校訂『新訂都名所図会』5、解説、1999)。

『国書総目録』には、秋里籬島の著書として45が収録されている。もちろんその多くは名所図会であるが、それ以外に『絵本年代記』(享和2年)、『教訓安楽問答』(享和3年)、『源平盛衰記図会』(寛政6年)、『絵引節用集』(寛政8年)、『絵本朝鮮軍記』(寛政12年)、『俳諧早作伝』(安永5年)、『忠孝人龍伝』(天明2年)、『秋里随筆』(文化7年)などが掲げられている。幅広い著作活動をしたことが知られるが、そのなかに絵本、絵引、図会など図像を加えたことを重視する書名が多く、単なる挿絵ではなく、図像を著作の重要な要素として考え、重視していたことが分かる。それは多くの名所図会を著したこととも関連するであろう。文字を用いて書くのは自分であるが、具体的なイメージを与える写実的な図像を挿入することの効果を知っていて、絵師と組んで、図像を豊富に取り入れた書物を著すことを考え出したものと推測される。

『東海道名所図会』は、東海道五十三次の各宿場についても記述はするが、宿場そのものの記事は大部分がごく簡単なものである。まして旅籠の紹介、宿泊料、渡しの経費などを教えるような記述はない。その意味では、この本を手にしても旅はできない。

取り上げているのは、和歌にうたわれたような名所であり、それらの場所をうたった歌を挿入して紹介し、また歴史上の出来事の舞台となった場所を取り上げて、歴史的な事件を説明すると共に、想像図でその事件を描いて入れている。そして、取り上げた場所は、東海道の街道筋だけでなく、街道から離れたところも少なくない。遠州秋葉山や相模の大山などはその代表である。東海道を旅しつつ、そこから足を伸ばして山中の名所へも誘おうとしている。

しかし、それ以上に注目されるのは、各地の特産物の販売や生産の様相、また各地の祭礼行事などが記述され、挿絵を加えて詳細に描き出されていることである。現在ではその面影もないが、江戸に近い大森海岸はかつて浅草海苔の生産地であった。冬の寒い時期に、海に入って海苔を採取してから、それを天日に干して商品にするまでの過程を詳しく記述し、またそれに対応する図を4ページにわたって掲載している。

3 名所図会の挿絵

書名が図会となっているように、『東海道名所図会』には199枚の挿絵が挿入されている。全6巻の文章はすべて秋里籬島の筆になるが、挿入された絵は一人の作品ではない。「凡例」で「画図は京師、江戸および諸邦の寄合書なり、故に画ごとに姓名印章あり、細図は浪速竹原春泉斎の一筆によりて姓名を記さず」と記載している。「寄合書」という方式、すなわち複数の絵師の競作となっているのである。この絵師の描き方の相違がまた本書を興あるものに仕立て上げているとあってよいであろう。名前が登場する絵師は30人に及ぶ。もっとも多くの絵を描いたのは竹原春泉斎である。春泉斎は、『都名所図会』の挿絵を担当した竹原春朝斎の子である。春泉斎は実景を見事に描き出している。特に近景では、その写実性は大きく、父親同様に魅力ある多くの挿絵を挿入している。東海道の全行程で春泉斎の絵を挿入しているので、秋里籬島の取材旅行に同行していた可能性もある。その他に下川辺雅恵も比較的多く描いており、しかも京都から近江にかけてだけで

表1 『東海道名所図会』挿絵の描写方法分類

描写方法	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	計
①上方からの俯瞰図	17	23	19	20	16	22	117
②歴史的事項の想像図	5	3	9	3	7	8	35
③対象に迫る近景図	8	14	7	4	5	4	42
④事物のみ単体描写	2	2				1	5
計	32	42	35	27	28	35	199

※2ページ見開きの絵は1枚と計算した。

なく、鎌倉の建長寺なども描いている。やはり東海道を歩いたのであろう。また有名な円山応挙も園山主水という通称で逢坂山を描いている。その他、法橋中和、山口素絢、土佐光安、石田友汀などの名前が示されている。

他方、特定の範囲のみの絵に登場する名前もある。その代表は、鋏形蕙斎である。図には蕙斎、蕙斎政美、政美などと記されている。現在の横浜市になる神奈川から、玉川、矢口渡、大森、海苔採取、海苔生産、御殿山、高輪など総てを描いて江戸日本橋に達している。鋏形蕙斎は宝暦14年（1764）生まれであり、『東海道名所図会』が刊行された寛政9年（1797）にはまだ30歳余りであった。浮世絵師であった蕙斎は北尾政美を名乗っていたが、寛政6年（1794）に津山藩のお抱絵師となり、鋏形蕙斎と改称した。改称後まもなくの作品がこの『東海道名所図会』の挿絵ということになる。鋏形蕙斎といえば江戸鳥瞰図の作者として有名であるが、名所図会にも挿絵を多く描いているのである。その他、東海道の途中の場面では、それぞれの地方の絵師が起用されている。

挿入図199枚を分類してみると、①上方から対象を俯瞰するようにして名所を描いた絵が117枚、②名所で起こった歴史的出来事を想像で描いた絵が35枚、そして、③対象に迫り、近景から詳細に描き、特に人物を詳しく描いたものが42枚、④その他風景ではなく事物のみを描いたものが5枚となっている。やはり名所図会としての目的を117枚の風景描写で示しているといえよう。挿絵の58%を占めている。また歴史的イベントの想像図が35枚ある。印象では多いように見えるが、数量的には18%である。

『東海道名所図会』の特色は風景を遠景俯瞰図と

して描くだけでなく、対象に迫って人物を大きく描く近景図を多く挿入していることである。これは作者の秋里籬島の構想によるものと思われる。籬島の第一作『都名所図会』にも多くの近景図がすでに含まれていた。あるいはこの評判が良く、それ以降も近景図を挿入して、『東海道名所図会』にいたったものと思われる。『東海道名所図会』における近景図は全部で42枚で、全体の21%になる。近景図の挿入されている巻を見ると、もっとも多いのが巻二で14枚、この巻の挿入絵42枚の33%を占める。次いで巻一の8枚、25%、巻三の7枚、20%である。そして相模から江戸を記述する巻六ではわずかに4枚、11%に過ぎない。西高東低がはっきりと示されているのも興味深い点である。近景図には必ず人物が大きく描かれている。それらは写実的である。しかもそれは特別畏まった姿ではない。日常的生活のスタイルが示されていて、見る人に親しみを感じさせるものがある。鳥瞰的な風景図のなかにこのような近景図が挿入されることで、東海道各地が親しみのあるものに感じられたのではなかろうか。『東海道名所図会』は、この近景図を挿入することで人間味のある書物となった。

その近景図を挿入した独創性は大きく、はるか離れた土地の暮らしや状況を具体的に示してくれた。その描写は十返舎一九の『金草鞋』や『東海道中膝栗毛』にも影響を与え、また東海道各宿を描いた広重の絵の構図にも類似のものがある。逆に言えば、『東海道名所図会』の挿絵には、オリジナル性が大きく、資料的価値も高いと言える。

4 名所図会による絵引編纂

いうまでもなく、絵引は財団法人日本常民文化研究所が編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』が作り出した新しい編纂方式である。その編纂を主導した渋沢敬三は「絵引は作れぬものか」（1954）という短文を発表し、「字引とやや似かよった意味で、絵引が作れぬものかと考えたのも、もう十何年前からのことであった。（中略）画家が苦心して描いている主題目に沿って当時の民俗的事象が極め

て自然の裡にかなりの量と種目を以て偶然記録されていることに気がついた」と述べた。絵画に描かれた事物から情報を引き出そうとしたのが『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻である。古代・中世の絵巻物を素材に、その絵巻物の物語性やテーマとは関係なく、そこに偶然にも描き込まれている人々の行為や事物を取りだし、それを見出しとして、事物や行為の名称を示すといもうのであった。字引ではなく、絵引を編纂するという全く新しい試みであった。それまでも辞書編纂方式として図解という方法は採用されていた。図解は辞書編纂のために書き下ろされた図であり、しかも単語に対応した事物のみ単体で描くのが基本であった。それに対して、過去に描かれた絵画を用いることで、特定の時代性を獲得し、そして単体ではなく関連した事物や行為、あるいは場所を示すことで、その全体性・関連性を確保するものであった。本書はそのような『絵巻物による日本常民生活絵引』の特色を継承発展させ、時代を近世にとって、絵引編纂を行った。『日本近世生活絵引』として編纂を始めた一冊が、名所図会による絵引編纂の試みであった。

『東海道名所図会』による絵引編纂は以下のような手順で進められた。

1. 『東海道名所図会』全6巻に挿入されている挿絵約200点をスキャナで読み込み、デジタル画像フ

ァイルとする。

2. 200点の図像のうちから生活に関わる情景が描かれている図50点を選択した。描写方法別の分類の近景図が主として選択の対象になったことはいうまでもない。

3. 各絵のなかに描き出された事物や行為をできるだけ多く取り出し、それらに番号を付け、その名称を付ける。名称はできるだけ近世に用いられた言葉を付ける。関連資料によって確認しつつ記入し、その根拠となった出典を明示する。

4. キャプションを付ける過程で、絵に示された主題を決め、それに関係が弱い部分を省略する形で切り取る。

5. 主題を中心に、描かれた図柄全体を読み取り、その意味を説明すると共に、それとの関係で個別事物についても解説する。

6. 見開き2ページに1枚の絵を入れ、絵・キャプション・解説文を割り付ける。

7. 絵50枚によるA4判100ページの試案本として完成させ、『日本近世生活絵引』東海道編として印刷公刊する。すなわち、本書である。これは完成品ではない。試みとして作った、私たちが言う「試案本」であり、今後種々補訂を加えなければならない性質のものである。

(ふくた・あじお)

『東海道名所図会』の視点

富澤 達三

はじめに

江戸時代中期、幕藩体制は安定し、日本国内は平和な時代が続いた。各地で農林水産業の生産が増加し、江戸・大阪・京都などの大都市は五街道とそれらを補う脇街道で結ばれた。三代将軍・徳川家光の時代に参勤交代制度（外様大名には1635年より、譜代大名に対しては1642年に制度化）が作られ、庶民だけでなく、大名たちも江戸と領国を行き来した。生産力の向上で商品や情報流通の活性化は進み、交通路の重要性は増していく。大量の物資の運搬には海路が使われ、東・西回りの沿岸航路が成立する。各国で生産された、米穀をはじめとする大量の生産物は、「天下の台所」大阪に集積されたのち、全国へ送られた。地域と地域を結んだ全国的経済圏は、年々拡大したのである。

1 名所図会の時代

(1) —— 「などころ」から「めいしょ」へ

全国経済の発展とともに、人々の生活にも余裕が生まれ、寺社・古跡・景勝地などの「名所（めいしょ）」を訪れる旅行がさかんとなる。本来「名所」は「などころ」と読み、勅撰の八大集に加えた十三集、合計二十一の歌集に収録された和歌で詠まれた地名である。和歌に詠まれていない土地は有名であっても「古跡」という。また「などころ」はあくまで歌枕で、実際に訪れるべき場所ではなかったが、近世になると^{みやび}「などころ」の地は、実際に訪れて楽しむ「名所（めいしょ）」となったのである。そして、多くの庶民へ名所の情報を伝え、旅へのあ

こがれを掻き立てたメディアが、名所を挿図と文章で紹介した地誌「名所図会」であった。

「名所図会」の嚆矢は、京都寺町五条上ル町の本屋・吉野屋為八（殿為八）が企画し、読本作家で俳諧師の秋里籬島（²）の文章・竹原春朝斎の挿図による『都名所図会』（安永9年＝1780）である。同書が爆発的な売れ行きをみせると、名所図会ものが続々と出版された。それらは地域や国ごと、または街道別に出版され、情報の正確さや鳥瞰図風の緻密な挿図で、生活に余裕を持ち、旅に遊ぶことを夢見る人々や、実際に旅を経験した人々を購買対象とし、続々と作られていったのである。

版元・吉野屋為七が『都名所図会』を刊行した経緯については、滝沢馬琴の随筆『異聞雑考』の「吉野屋為八」⁽¹⁾の項に詳しい。

京都、五条に住む商人の吉野屋為八は、米穀・燈油売買で投機的な商売を行って大成功し豊かになったが、飲酒・色事はもとより、漢詩・和歌・俳諧などの風流の楽しみを知らなかった。ある日、為八は「自分は京都生まれなので、京都の図会本を出版して売り出したならば楽しいに違いない」と考えた。そこで知人の本屋に相談すると、本屋いわく「それぞれの本には『板株』という出版営業権があり、板株を所有する者でなければ、本の出版はできない」と教えてくれた。そこで為八は京都で出版されていた名所記の板株を本屋からすべて買い取り、図会の出版に抗議が出ないようにした。これらの板株買い取り料は、合計300両にもなったという。

板株を取得した為八は、俳諧師の秋里籬島⁽²⁾と画工の竹原春朝斎に計画を語ると、二人とも承知した。為八は二人の生活を保証し、丸抱えにして3

年で原稿が完成、版木の完成まで5～6年を要し、全ての費用は2000両を越えたという。こうして完成した『都名所図会』であったが、為八の予想に反して思うようには売れなかった。しかし楽しみでしたことゆえ、ゆくがままに過ごしていた。ところが、大坂城代であった若狭小浜の藩主・酒井侯が所要で江戸に参向の際、懇意の者への土産として『都名所図会』を十数部持って行ったところ、これが評判となって、翌年には4000部余も売れ、為八は2000両の元手を2年で回収し、なお余剰金が出たという。

『都名所図会』は刷りに刷りを重ね、天明6年(1786)正月には再刻本が出版された。吉野屋為八は本書で巨利を得、天明9年(1780)に続編ともいふべき『拾遺都名所図会』(秋里籬島文、竹原春朝齋画)を刊行する。その後、名所図会もの大ヒットに注目した京都の版元小川多左衛門が、秋里籬島・竹原春朝齋のコンビで『大和名所図会』(寛政3年=1791)を出版する。吉野屋為八も江戸の版元西村源六・雁金屋治上右衛門らとともに『住吉名所図会』(秋里籬島文、岡田玉山画)を寛政6年(1794)に出版し、摂津・伊勢・河内・紀伊・江戸などの地域を取り上げた名所図会が続々と作られていったのである。⁽³⁾

2 『東海道名所図会』を読む

(1) —— 『東海道名所図会』の挿図分類

『東海道名所図会』⁽⁴⁾(寛政9年=1797)は、本文を秋里籬島、挿図は竹原春泉齋(『都名所図会』などで籬島と組んだ竹原春朝齋の子)以外に、円山応挙・鋏形蕙齋(北尾政美)ら総勢30名が担当している。版元は京都の田中庄兵衛・吉野屋為八(殿為八)らで、江戸の版元も須原茂兵衛(須原屋)以下3名が名を連ねた。

『東海道名所図会』の挿図は199点あり、おおよそ以下のように分類できる。⁽⁵⁾

- ① 神社仏閣…77件
- ② 景勝・古跡…77件

- ③ 建築物 …5件
 - ④ 繁華の場…28件
 - ⑤ 市場・生産の場…12件
- (以上、合計199点)⁽⁶⁾

「①神社仏閣」は宮中の年中行事や、伝統ある神社や仏閣の縁起・祭礼を挿図と文章で紹介したものである。祭礼を挿図と文書で紹介し、古歌・漢詩が添えられる。

「②景勝・古跡」は自然が作り出した雄大な景観や奇景・古跡を紹介するのみならず、その地に関連する歴史的事件の想像図が描かれ、歴史書・紀行文など古典籍よりの引用、関連する和歌・俳句などが載る。跋文から秋里籬島は京都から江戸までを実際に旅し、現地取材を行ったことが知られる。なお、当時のコレクターによる奇石の収集や寺院の宝物類も当分類に含めた。

「③建築物」には橋が該当する。江戸幕府は戦略上、大河に橋を架けなかったが例外もあった。岡崎の矢矧橋、三河国豊川の豊橋、近江国の勢田橋⁽⁷⁾などである。かつて架けられていた橋(遠州・浜名橋)を想像して描いた図⁽⁸⁾もある。

「④繁華の場」は、大勢の人々が集う繁華の場所を描いたもので、港湾などの交通の要衝、名物を売る大店・遊郭・温泉・名水などである。例えば「梅木の和中散」(90・91頁)や「草津の姥ヶ餅」(86・87頁)、そして性産業(三島の飯盛女)すら描かれた(32・33頁)。

「⑤市場・生産の場」の図は、雅な「などころ」の風情から最もかけ離れた、新たな名所^{めいしょ}であろう。江戸時代、各地で生産力が発展するなか、様々な農産物・加工品・工芸品が生産され、江戸・京都・大坂・名古屋などの巨大消費地や地方都市で売買された。「草津の青花栽培」(44・45頁)「池鯉鮒の馬市」(50・51頁)「大森の海苔栽培と加工」(56～59頁)「日本橋魚市場」(38・39頁)など商業・農業・漁労の場が描かれた。これらは人間が自然や家畜と向き合い、時には危険な場所や厳しい気象条件下で行われる厳しい作業であった。しかし、過酷な労働環境のなかで、道具を工夫して自然の恵みを最大限に利用し、商品作物を生産する人々が現れたのである。



図1 千葉正樹氏による『江戸名所図会』の視点分類

「④繁華の場」「⑤市場・生産の場」を描いた図は、『東海道名所図会』の挿図全体で見れば、20%弱とやや少ないが、近世後期の庶民の生産力向上と経済活動の活発化を象徴したエネルギッシュな風景であり、籬島たち製作者の創作意欲を大いに喚起させたのであった。⁽⁹⁾

(2) —— 近景・中景・遠景・超遠景

近年、千葉正樹氏は『江戸名所図会』の視覚分析を進め、新たな近世図像学・文化史学を開拓している。同氏は『江戸名所図会』の図像の視点距離を以下の4つに分け、画像分析を行った。千葉氏の提示した4つの視点分類は以下の通りである。⁽¹⁰⁾

1、近景……10m内外の視点で対象を描く。男女・老若・身分や職業など人物の属性、服装の文様、個々人の容貌・建物の部材・小動物、店先の商品内容にいたるまで精密に書き分けている。建物の場合、

瓦の一枚一枚まで丹念に描かれている。

2、中景……数十mくらいからの視点である。目・鼻・口は一本の線で表現され、容貌の特徴はうかがえないが、服装や髪型・持ち物から人物の属性を判断できる。建築物はやや省略されるが、瓦葺屋根の場合、棟の先端に鬼瓦を描き、棟と軒を2～3本の直線で表現し、瓦の連なりを示す縦の平行線があり、瓦葺屋根だと判定できる。

3、遠景……対象から100m以上。人物の目鼻は消え白抜きとなるが、服装や髪型のアウトラインは読み取れる(例：武士は二本差し)。屋根の材質はわからない。

4、超遠景……対象から数百m。人物は縦の線で表現され、屋根は白い方形となり、材質は完全に不明となる。

※図1は千葉氏の『江戸城が消えていく』155頁より引用。

表1 『東海道名所図会』 画像分類

巻	題名(本文等を参照した)	分類	視点	本書収録頁
1	小朝拜	①神社仏閣	①近景	
2	小朝拜(続き)	①神社仏閣	①近景	
3	坂本の山王祭	①神社仏閣	①近景	64・65頁
4	石山寺什宝 紫式部古硯	①神社仏閣	①近景	
5	熱田神宮 踏歌神事	①神社仏閣	①近景	
6	熱田御神社 烏喰神事	①神社仏閣	①近景	
7	吉田天王祭	①神社仏閣	①近景	72・73頁
8	三島大社のお田打ち	①神社仏閣	①近景	74・75頁
9	鶴岡若宮での静御前の舞	①神社仏閣	①近景	
10	矢口村新田明神社由来	①神社仏閣	①近景	
11	鈴が森神社 烏石	①神社仏閣	①近景	
12	山王祭 鷹崎神供	①神社仏閣	②中景	
13	津島祭	①神社仏閣	②中景	70・71頁
14	熱田鎮皇門楼上神幸の祭式	①神社仏閣	②中景	
15	江ノ島例祭	①神社仏閣	②中景	
16	近松御坊世壽寺牛塔	①神社仏閣	③遠景	
17	唐崎社一ツ松	①神社仏閣	③遠景	
18	山王二の宮十禪師	①神社仏閣	③遠景	
19	堅田浦 浮御堂	①神社仏閣	③遠景	
20	大津京町 四宮御神 精大明神	①神社仏閣	③遠景	
21	義仲寺 芭蕉塚	①神社仏閣	③遠景	
22	石山寺門前 東寺が崎	①神社仏閣	③遠景	
23	石山寺	①神社仏閣	③遠景	
24	国分寺 芭蕉翁幻住庵古跡	①神社仏閣	③遠景	
25	岩間寺	①神社仏閣	③遠景	
26	鵜崎 八幡宮	①神社仏閣	③遠景	
27	飯道寺	①神社仏閣	③遠景	
28	土山 田村明神社	①神社仏閣	③遠景	
29	鈴鹿社	①神社仏閣	③遠景	
30	関 地藏院	①神社仏閣	③遠景	
31	太神宮別道	①神社仏閣	③遠景	
32	日本武尊陵	①神社仏閣	③遠景	
33	石薬師寺	①神社仏閣	③遠景	
34	多度山	①神社仏閣	③遠景	
35	津島 牛頭天王	①神社仏閣	③遠景	
36	宮崎 浜鳥居	①神社仏閣	③遠景	
37	熱田 八剣宮 御所前 撰社末社	①神社仏閣	③遠景	
38	熱田 大宮 正殿 土用殿	①神社仏閣	③遠景	
39	古渡 高倉神社	①神社仏閣	③遠景	
40	笠守	①神社仏閣	③遠景	
41	鴨海神社 蕉翁 千鳥家	①神社仏閣	③遠景	
42	知立神社	①神社仏閣	③遠景	
43	鳳来寺	①神社仏閣	③遠景	
44	鳳来寺惣門	①神社仏閣	③遠景	
45	蔵庭 鶴音	①神社仏閣	③遠景	
46	秋葉山 一鳥居	①神社仏閣	③遠景	
47	秋葉山社	①神社仏閣	③遠景	
48	阿波が岳 阿波波神社	①神社仏閣	③遠景	

49	草薙神社	①神社仏閣	③遠景	
50	村松久能寺	①神社仏閣	③遠景	
51	清見崎 清貝寺	①神社仏閣	③遠景	
52	三島神社 鳥居前	①神社仏閣	③遠景	
53	三島神社	①神社仏閣	③遠景	
54	江ノ島弁天堂	①神社仏閣	③遠景	
55	竜口寺 日蓮上人旧跡	①神社仏閣	③遠景	
56	鶴岡八幡宮	①神社仏閣	③遠景	
57	鶴岡八幡宮(続き)	①神社仏閣	③遠景	
58	由井兵 大鳥居	①神社仏閣	③遠景	
59	建長寺	①神社仏閣	③遠景	
60	円覚寺	①神社仏閣	③遠景	
61	光明寺	①神社仏閣	③遠景	
62	藤沢 清浄光寺	①神社仏閣	③遠景	
63	大師河原 平間寺	①神社仏閣	③遠景	
64	三田八幡宮	①神社仏閣	③遠景	
65	芝の壇上寺	①神社仏閣	③遠景	
66	逢坂山 関明神 蟬丸祠	①神社仏閣	④超遠景	
67	三井寺	①神社仏閣	④超遠景	
68	三井寺(続き)	①神社仏閣	④超遠景	
69	尾蔵寺 近松寺 八詠楼	①神社仏閣	④超遠景	
70	東坂本 西教寺 采迎寺	①神社仏閣	④超遠景	
71	日吉山王	①神社仏閣	④超遠景	
72	比叡山 四明峰(続き)	①神社仏閣	④超遠景	
73	田神不動寺	①神社仏閣	④超遠景	
74	大山寺 一鳥居	①神社仏閣	④超遠景	
75	大山寺	①神社仏閣	④超遠景	
76	神奈川 駅の南 芝生 浅間社	①神社仏閣	④超遠景	
77	逢坂山 関寺 小町	②景勝・古跡	①近景	
78	蟬丸	②景勝・古跡	①近景	
79	志賀里	②景勝・古跡	①近景	
80	志賀寺の上人	②景勝・古跡	①近景	
81	明智光秀の湖上渡り	②景勝・古跡	①近景	
82	今井四郎 兼平の 粟津原血戦	②景勝・古跡	①近景	
83	石山の 蛭狩り	②景勝・古跡	①近景	
84	六玉川の中 野路玉川	②景勝・古跡	①近景	
85	秀郷 竜宮城に至る	②景勝・古跡	①近景	
86	石葺	②景勝・古跡	①近景	
87	草津駅の活人石を 観る 琉球人	②景勝・古跡	①近景	
88	金勝山の 霊岩	②景勝・古跡	①近景	
89	田村将軍の 鬼人 退治	②景勝・古跡	①近景	68・69頁
90	桶狭間の 戦(続き)	②景勝・古跡	①近景	
91	桶狭間の 戦(続き)	②景勝・古跡	①近景	
92	在原 兼平 吾妻下り	②景勝・古跡	①近景	
93	牛久保 山本勘助の 故居	②景勝・古跡	①近景	
94	引馬野	②景勝・古跡	①近景	
95	さざんざの 松	②景勝・古跡	①近景	
96	天竜川を 渡る 船田入道	②景勝・古跡	①近景	
97	遠州 桜が池	②景勝・古跡	①近景	
98				

99	三	志留波磯	②景勝・古跡	①近景	12・13頁
100	四	秋葉山中の茶店	②景勝・古跡	①近景	
101	四	菊川宿	②景勝・古跡	①近景	
102	四	宗尊王 宇津の山通行	②景勝・古跡	①近景	
103	四	富士川水鳥古跡	②景勝・古跡	①近景	
104	五	竹取翁 かぐや姫	②景勝・古跡	①近景	
105	五	富士裾野での瓜あげ	②景勝・古跡	①近景	
106	五	富士の牧狩	②景勝・古跡	①近景	
107	五	富士の牧狩(続き)	②景勝・古跡	①近景	
108	五	曾我兄弟の敵討	②景勝・古跡	①近景	
109	五	足柄山での秘曲伝授	②景勝・古跡	①近景	
110	五	門覚上人と千本松原	②景勝・古跡	①近景	
111	五	頼朝義経再会之地	②景勝・古跡	①近景	
112	五	秋の鴨立沢	②景勝・古跡	①近景	
113	六	稲村が崎	②景勝・古跡	①近景	
114	六	土牢内の護良親王	②景勝・古跡	①近景	
115	六	滑川の青戸藤綱	②景勝・古跡	①近景	
116	六	西行と銀猫	②景勝・古跡	①近景	
117	六	小栗小次郎の伝	②景勝・古跡	①近景	
118	六	玉川	②景勝・古跡	①近景	
119	一	一日吉山王三十六歌仙(三枚紙)	②景勝・古跡	②中景	
120	二	野路 玉川古跡	②景勝・古跡	②中景	
121	二	平松山美松	②景勝・古跡	②中景	
122	三	池田宿の平重衡	②景勝・古跡	②中景	
123	五	鴨立沢 鴨立庵	②景勝・古跡	③遠景	
124	二	筆捨山	②景勝・古跡	③遠景	
125	二	四日市那古浦の蟹気楼	②景勝・古跡	③遠景	
126	三	八幡杜若 古跡	②景勝・古跡	③遠景	
127	三	今切	②景勝・古跡	③遠景	
128	三	遠湖 彫江村 館山寺	②景勝・古跡	③遠景	
129	三	赤巖 宝樹庵	②景勝・古跡	③遠景	
130	四	菊川	②景勝・古跡	③遠景	
131	四	宇津山高細道	②景勝・古跡	③遠景	
132	四	連歌師宗長の古跡	②景勝・古跡	③遠景	
133	四	薩埵山	②景勝・古跡	③遠景	
134	四	興津川	②景勝・古跡	③遠景	
135	四	薩埵山東麓 西倉沢茶店	②景勝・古跡	③遠景	
136	五	富士裾野	②景勝・古跡	③遠景	
137	五	原駅 松陰寺白隠和尚古跡	②景勝・古跡	③遠景	
138	六	江ノ島海浜	②景勝・古跡	③遠景	
139	六	七里浜	②景勝・古跡	③遠景	
140	六	品川御殿山の花見	②景勝・古跡	③遠景	78・79頁
141	一	粟津松原	②景勝・古跡	④超遠景	
142	三	本野原富士	②景勝・古跡	④超遠景	
143	四	佐野中山	②景勝・古跡	④超遠景	
144	四	三保入江	②景勝・古跡	④超遠景	
145	四	三保の松原	②景勝・古跡	④超遠景	
146	四	久能山からみた三保崎	②景勝・古跡	④超遠景	
147	五	富士山の裾野	②景勝・古跡	④超遠景	
148	五	富士山	②景勝・古跡	④超遠景	
149	五	富士山	②景勝・古跡	④超遠景	

150	五	富士山鳥瞰図	②景勝・古跡	④超遠景	
151	五	箱根駅 関所周辺	②景勝・古跡	④超遠景	
152	五	箱根権現社	②景勝・古跡	④超遠景	
153	五	箱根小地獄	②景勝・古跡	④超遠景	
154	六	金沢能見堂 筆捨松	②景勝・古跡	④超遠景	
155	一	平安城三条橋	③建築物	③遠景	
156	二	勢田橋	③建築物	③遠景	
157	三	矢矧橋	③建築物	③遠景	
158	三	吉田豊川の豊橋	③建築物	③遠景	
159	三	遠州浜名橋	③建築物	③遠景	
160	一	祇園の賑わい	④繁華の場	①近景	24・25頁
161	一	東三条の送迎風景	④繁華の場	①近景	26・27頁
162	一	走井の名水	④繁華の場	①近景	82・83頁
163	一	大津の遊郭	④繁華の場	①近景	28・29頁
164	二	草津追分	④繁華の場	①近景	2・3頁
165	二	宿場の往来	④繁華の場	①近景	6・7頁
166	二	旅館の宿入り	④繁華の場	①近景	8・9頁
167	二	雷田の焼き蛤	④繁華の場	①近景	92・93頁
168	二	七里の渡し	④繁華の場	①近景	10・11頁
169	四	道中の震助	④繁華の場	①近景	
170	四	藤枝瀬戸の染め飯	④繁華の場	①近景	96・97頁
171	四	安部川川の渡し	④繁華の場	①近景	18・19頁
172	五	三島宿の夕暮れ	④繁華の場	①近景	32・33頁
173	五	箱根塔沢の温泉宿	④繁華の場	①近景	76・77頁
174	五	小田原いろいろ	④繁華の場	①近景	100・101頁
175	六	大森の麦わら細工店	④繁華の場	①近景	54・55頁
176	二	草津の焼ケ餅	④繁華の場	②中景	86・87頁
177	二	目川の茶店	④繁華の場	②中景	88・89頁
178	二	梅木和中散の店構え	④繁華の場	②中景	90・91頁
179	二	坂下宿本陣	④繁華の場	②中景	4・5頁
180	三	岡崎宿の朝	④繁華の場	②中景	30・31頁
181	四	大井川を渡る大名行列	④繁華の場	②中景	16・17頁
182	四	大井川の渡し	④繁華の場	②中景	14・15頁
183	五	箱根湯本の拵物細工店	④繁華の場	②中景	98・99頁
184	二	矢橋 渡口場	④繁華の場	③遠景	
185	四	富士川の渡船	④繁華の場	③遠景	
186	六	高輪の茶店	④繁華の場	③遠景	
187	六	京橋から新橋へ	④繁華の場	③遠景	20・21頁
188	一	大津絵販売店	⑤市場・生産の場	①近景	36・37頁
189	二	草津の青花紙	⑤市場・生産の場	①近景	84・85頁
190	二	桑名の海	⑤市場・生産の場	①近景	44・45頁
191	二	阿波手の社と漬け物	⑤市場・生産の場	①近景	46・47頁
192	三	有松絞	⑤市場・生産の場	①近景	94・95頁
193	三	池鯉鮒の馬市	⑤市場・生産の場	①近景	48・49頁
194	六	大森の海苔採取	⑤市場・生産の場	①近景	50・51頁
195	六	大森の海苔作り	⑤市場・生産の場	①近景	56・57頁
196	六	江戸湾の漁業	⑤市場・生産の場	①近景	58・59頁
197	六	江戸の本屋	⑤市場・生産の場	①近景	60・61頁
198	六	日本橋魚市場・お江戸日本橋	⑤市場・生産の場	②中景	34・35頁
199	五	駿河湾の地曳網業	⑤市場・生産の場	③遠景	38~41頁

近景…78点、中景…18点、遠景…77点、超遠景…25点となった。

千葉氏の「近景・中景・遠景・超遠景」の4視点による『江戸名所図会』の分析は、『東海道名所図会』の挿図解析にも応用しうるものであり、著者は『東海道名所図会』所収の画像199点を前述の、「①神社仏閣」「②景勝・古跡」「③建築物」「④繁華の場」「⑤市場・生産の場」に分類し、さらに千葉氏の4つの視点分析と組みあわせた〈表1〉。

その結果、近景（78点）・中景（18点）・遠景（77点）・超遠景（25点）という結果が得られた。概して、神社・仏閣・古跡は、遠景ないし超遠景で描かれる。一方、人々が作り出す繁華の場・市場や生産の場は、近い視点から描かれているのである。

3 今後の展望

『東海道名所図会』は、秋里籬島による東海道の実地調査と古典籍・古歌の引用文、30名を超える絵師の挿図による「見て楽しむ地誌」であった。知識人向きの本屋から出版され、古歌・古典籍からの引用がなされて情報量が多いが、漢字には読み仮名

も多く付けられ、武士階級はもちろん、文字に通じた農・工・商階級も楽しむことができる情報媒体であった。挿図の人物描写は典型的で、士・農・工・商の階級、男女の老若・職業などは、現代の我々でも比較的容易に見分けることができる。ましてや当時の人々ならば、髪型や服装・持ち物などから、さらに微妙な階級間の差異、時には性的な記号など、多くの情報を理解したと考えられる。しかしながら、現代の我々がそれらを見分けることは難しい。また人物以外の、背景に描かれた器物の名・建物の様式などは、多くの専門研究者の知識がなければ解読が難しい。今後は数十種類ある「名所図会」の画像を横断的に集め、データベース化していくべきであろう。図像の種類では、庶民の経済活動を描いた「④繁華の場」「⑤市場・生産の場」が、視点では「近景」「中景」から対象を捉えた画像が主要な分析対象となっていくと考えられる。一方「遠景」や「超遠景」の視点、上空から広範囲を見渡す鳥瞰図的画像が読者に与えた「視覚的快感」の歴史的意味も考察されるべきだと考える。

（とみざわ・たつぞう）

【注】

- (1) 『続燕石十種 第二巻』（中央公論社、1980年）278～280頁所収。なお、『新版 都名所図会』（角川書店、1976年）の竹村俊則氏の解説文にも全文が掲載されている。
- (2) 秋里籬島は名所図会をはじめ、数々の書籍を世に出した当時のブックメーカーであり、作庭家でもあったというが、その伝記は不詳である（前出、竹村氏解説書）。このほか、籬島の軌跡を追った論考に、浅野三平氏の「秋里籬島」『近世中期小説の研究』（桜楓社、1975年）がある。
- (3) 篠原曜『諸国名所図会に描かれた近世後期の経済活動の諸相』（2000年、神奈川大学大学院経済学研究科経済学専攻、修士論文）では、刊行年不明の9点を含め、86種類としている。なお、篠原氏のデータでは『都名所図会』より前の名所図会として『日本山海名所図会』（宝暦4年）、『東国名勝志』（宝暦12年）を挙げている。これは、二書が後世の「名所図会」ものに与えた影響の大きさを重視したことによる。また同氏は「名所図会」ものは、京都→大坂→江戸→各地、の順に作られたと分析する（前掲書、20頁）。
- (4) 神奈川大学COEプログラムで所蔵する原本、粕谷宏紀監修『新訂 東海道名所図会』全3巻（ペリカン社、2001年）、同『東海道名所図会を読む』（東京堂出版、1997年）を参照した。
- (5) 加藤貴「行楽と信仰の流行度 一名所番付とお国自慢意識」（林英夫・青木美智男編『番付で読む江戸時代』柏書房、2003年）、青木美智男「地域の自覚 往来物と名所図会」（井上勲編『日本の時代史29 日本史の環境』吉川弘文館、2004年）参照。
- (6) 「巻之一」の「日吉山王三十六歌仙人」は3分割されているものを1点としてカウントした。
- (7) 矢矧橋は、『新訂 東海道名所図会 [中]』98頁、豊橋は同書129頁に掲載。勢田橋は『新訂 東海道名所図会 [上]』218頁。
- (8) 「巻之三」所収。前出『新訂 東海道名所図会』中巻160頁参照。
- (9) 青木美智男氏も、地誌としての名所図会で最も注目すべきこととして「特産物の生産光景や流通の拠点として繁栄していた在方市や港町などを新名所としてクローズアップするに至った点」を指摘する。前出・青木論文「地域の自覚 往来物と名所図会」、140頁。
- (10) 千葉正樹『江戸名所図会の世界 近世巨大都市の自画像』（吉川弘文館、2001年）91～92頁、同『江戸城が消えていく江戸名所図会の到達点』（吉川弘文館、2007年）154～154頁。

『東海道名所図会』にみる旅と飲食

山本 志乃

1 旅の記録と飲食の実態

『都名所図会』（安永9年＝1780）にはじまる一連の名所図会が次々と刊行された18世紀後半から19世紀にかけての日本は、旅の大衆化が大いに進んだ時期でもあった。

その背景には、日本国内での経済的な安定があることはいうまでもないが、とくに農民層が、商品作物の栽培や各種の農間稼ぎによって現金収入の手段を得、旅に出るだけの余裕を持てるようになったことが大きい。

それらの農民層を中心に、合理的な旅のシステムとして発展したのが、伊勢参宮を主とした講と代参のシステムであり、彼らの多くは、旅の記録を残すことを常とした。「道中記」と一般によばれるそれらの記録は、個人的な趣味で見聞を記すことももちろんあるだろうが、多くは宿泊先、参詣した社寺、休憩場所、川渡しなどを、そこで要した費用とともに記すことが目的であり、金銭出納帳のような体裁になっている。講の代参が、いわば村の公費を使つての出張であることを考えれば、こうした記録がなされるのは当然であろう。

近年では道中記を使った研究も進み、関東からの伊勢参宮にある一定のルートが確立していたことを裏づける研究や、⁽¹⁾女性の筆による旅日記から女性の旅を分析する試みなどがなされている。⁽²⁾しかし、道中記が示す情報には限りがあり、旅人の具体像すべてを教えてくれるものではない。どのようなでたちで、どういった場所を、どのようにして旅していたかという実態は、むしろ絵画資料の中に多くの情報を見出す場合もあるのである。

旅の実態のうちとりわけ文字化されにくいものの

ひとつに、飲食に関する記録がある。道中記に「ひるめし四拾八文」などと記載はあっても、何を食したのかまでは、ほとんどの場合書かれることはない。知識人層が記した特殊な紀行文を除けば、講の代参のような形での旅の記録に、飲食に関する詳細が記される例は、ごくわずかである。⁽³⁾

本稿では、こうした文字化されにくい飲食の実態が、『東海道名所図会』のなかでどのように描かれているかを抽出し、限られた文字資料ともつきあわせながら、当時の日本の旅と飲食について考察を試みる。⁽⁴⁾

2 簡便な飲食の装置

旅が大衆化するにあたって、食べ物の供給と宿所の確保はなにより不可欠な条件である。食べ物に関しては、巡礼者が米を持参したり、非常用として^{ほしいい}糶を携えたりすることももちろん行われ、野原で莫産を広げてにぎりめしを食べる巡礼のようすが絵画にも描かれているが、東海道では、⁽⁵⁾街道整備が成った比較的初期の段階ですでに、旅人に飲食を提供する装置として茶店が存在していた。

たとえば、万治4年（1661）頃に成立したとされる仮名草子『東海道名所記』には、「旅屋の遠き所にハ、店屋の餅、団子、茶屋の焼餅。其外在所により、家によりて、国の名物、酒、さかな、煮売焼売、色々あり」という記述があり、調理したものを旅人に食べさせ、酒を飲ませる茶店が、街道のあちらこちらに点在していたことをうかがわせる。同書には、茶店の挿絵も掲載されており、店先で団子や焼豆腐、⁽⁶⁾鰻のかば焼きなどを売るようすが描かれている。

また、元禄3年（1690）から元禄5年まで長崎オ

ランダ商館の医師として日本に滞在したドイツ人ケンペルは、商館長の江戸参府に随行した際の見聞録で、「数え切れない低級の旅館・小料理屋・居酒屋・食べ物や甘い物を売る茶店」について触れており、「これらのものは、われわれが旅する街道沿いや森や谷間などにもあって、そこで疲れた徒歩の旅行者や身分の低い人たちは、わずかな銭を払って、上等ではないが暖かい軽い食事をとり茶や酒を飲むことができる」と述べている。⁽⁷⁾

こうした街道の茶店の、おそらくきわめて原初的な形態と思われるものが、『東海道名所図会』の「秋葉山中の茶店」(p.12)と「池鯉鮒の馬市」(p.50)に描かれている。

「秋葉山中の茶店」では、山あいの道沿いに、日よけ兼雨よけの筵を棒で立てかけただけの簡素な店で、親父がひとり釜を火にかけている。その釜も、沿道の松の枝から吊り下げたものである。休憩する客のための縁台は、木の枝に板を渡した素朴なもので、一見して、手近な道具で組み立てた仮設の茶店であることがわかる。店番の親父の足元には、藁の束と編みかけの草鞋がみえる。編みあがったものは店に吊り下げ、商品となる。常時出店していたものかどうか、近隣の村人による臨時の街道稼ぎだったとも考えられる。釜で湯を沸かしているだけであるから、ここで提供できるのは茶か白湯程度であろう。客のなかには、天狗面を持参した、いわゆる金毘羅道者とよばれる漂泊の宗教者の姿もみえる。

こうした形態の茶店は、広重の『東海道五十三次』保永堂版の「袋井」にも描かれていて、簡素な小屋がけの店先に、木から吊りした薬缶が火にかけている。ここで休憩するのは駕籠かきの雲助と、六部のようなでたちの男で、やはり茶を飲むのがせいぜいの、仮設の茶店である。

いっぽう、「池鯉鮒の馬市」に描かれているのは、市の開催にあわせて集まる人々を目当てに出店した茶店である。屋根状の覆いもなく、縁台を置いただけの設えだが、竈があり、釜の縁からは田楽の串とおぼしき棒状のものがのぞいている。店主の男が手にするのはひょうたんで、酒も飲ませたようだ。きわめて簡素なつくりながら、煮売りの装置をそなえ

た茶店であることがわかる。茶店の隣には、筵に広げた果物のようなものを、買ったその場で食べるようすも描かれる。果物は、糖分と水分を同時に補給することができ、旅人の便宜にもかかっていたのであろう。

さらに簡便な煮売りの装置は、「坂本の山王祭」(p.64)の図にもみえる。そば・うどんの類か、茶飯類か、屋台の食べ物屋と、その脇で碗を手にした男が箸で食事しているようすが描かれている。現代風にいうならファストフードであり、「日本橋魚市場」(p.38)に描かれた鮎売まで含めると、この時代における外食文化の発達をうかがわせる。⁽⁸⁾

こうした食の設備があるかぎり、おそらく旅の途次において、ほんのわずかの路銀と備えさえあれば、食べる物に困ることはなかつただろうし、よほどの事情がない限りは、飢えて行き倒れるようなこともなかつたはずである。街道の茶店は、陸路だけでなく、水路にあっても存在した。「七里の渡し」(p.10)に描かれている煮売船は、「商い船」ともいい、渡船近くに漕ぎ寄って、客に酒や肴、餅、団子などのさまざまな食べ物を提供する、いわば水路上の茶店であった。

「秋葉山中の茶店」や先に触れた広重の「袋井」にあるような、茶と草鞋と休息場所を提供するだけの素朴な茶店は、金毘羅道者や駕籠かきなど、街道を渡世の場とする人々を客として迎え入れている。いっぽうで、こうした茶店そのものもまた、一種の街道渡世といえる。固定的な店構えをもたない簡易な茶店は、一般の旅人だけでなく、街道に生きるあらゆる階層の人々を包括する場でもあり、旅の安全に大いに寄与していたと考えることができる。

3 名物を看板にかかげる茶店

『東海道名所記』の記述にもあったとおり、江戸時代初期の東海道ではすでに、地域特有の名物を沿道の茶店で賞味することができた。同書と成立時期を同じくする俳諧作法書『毛吹草』にも、国別の名物が列記されており、地域ごとにさまざまな特色ある名物が認識されていたことがわかる。

『東海道名所図会』にも、こうした名物を売りにした茶店のようすが描かれている。「走井の名水」(p.82)、「草津の姥ヶ餅」(p.86)、「目川の茶店」(p.88)、「富田の焼き蛤」(p.92)、「藤枝瀬戸の染め飯」(p.96)などで、比較的簡素な店構えの「藤枝瀬戸の染め飯」以外は、いずれも奥に座敷を備えた立派な店舗である。

描かれたどの店にも共通しているのは、道路に面した表の部分に、名物を製する設備を備えていることである。田楽や焼き蛤などの焼き物は、火を焚き煙が出るために、通気性のよい位置で調理することにも合理性があるが、走井餅や姥ヶ餅の場合は、必ずしもそれを要しているわけではない。にもかかわらず、あえて通行人の目をひく表の場所で作っていると、より高い集客効果を期待する意図がよみとれる。

もともとは、前項でみたような屋台風の簡素な茶店から発して、しだいに奥に座敷を持つまでになったのであろうが、田楽や蛤を目の前で焼けば、その香りは自然と旅人の足を店へと向かわせるであろうし、当時としては貴重な砂糖をふんだんに用いた甘い餅も、歩き疲れた旅人の目にはたいへん魅力的に映ったに違いない。しかも、そうした食べ物の作り手に、女性を配しているところがさらに興味深いところである。

店の前面で作られる名物は、その店のまさしく看板の役割を果たしていた。店先に置けば自然と客が集まるほどに、名物は商標化し、人口に膾炙したのであろう。「姥ヶ餅」のように本当に看板を掲げているところもあるが、この店舗は上客を招き入れるための別の入り口と奥座敷を備えていたくらいであるから、むしろ茶店としては別格であったといえる。

「姥ヶ餅」と対照的な店構えを見せる「瀬戸の染め飯」は、老婆が店の奥で蒸籠を使って作った染め飯を、表に並べて売っている。休憩場所としては、縁台が置かれているだけで、奥に座敷はない。染め飯とは、クチナシで黄色に着色した強飯をすりつぶし、小判状に薄く成形して乾燥した、糯の一種である。つまり、その場で食するというよりは、非常食

代わりに携帯する食べ物であるから、わざわざ賞味するための空間を作る必要はないのである。

このように、『東海道名所図会』に描かれた名物と茶店の装置を見る限りでは、設備や集客の面で、どちらかというところ関西上位の文化であることが感じられる。伊勢参宮や西国巡礼などで多くの人を迎え入れてきた伝統が、店構えや集客方法にも反映しているのであろうか。それがまた、東国からの旅人を惹きつける魅力のひとつともなっていたのかもしれない。

挿絵には描かれていないが、本文には、猿馬場(三河国二川)の柏餅、日坂(遠江国)の蕨餅、駿河国の安倍川餅、薩埵嶺(駿河国興津)の栄螺・鮑、富士沼(駿河国吉原)の鰻、江ノ島(相模国)の鮮魚などが、茶店で食することができる名物として記載されている。なかには茶店の位置や名前まで具体的に記されているものもあり、こうした名物が旅の誘因のひとつとなっていたことをうかがわせる。

ここで、薩埵嶺の栄螺・鮑、富士沼の鰻、江ノ島の鮮魚といった、生鮮魚介類が名物として挙げられていることに注目したい。日本の伝統的な食材として、魚は重要な意味を持っているが、海沿いの漁村周辺を除いては、日常的に食することのできるものではなかった。山間部の農村にいたっては、行事の際に、塩干物として保存加工を施した魚を遠方から手に入れるのがせいぜいのところもあり、海産物は総じてハレの日の貴重な食べ物であった感が強い⁽⁹⁾。

旅先においても、たとえば『東海道中膝栗毛』のなかで、茶店の女が「無塩^{ぶえん}の肴で酒でもお飯でもあがりまアし」と、弥次・喜多を誘う場面がある。塩干処理を施さない鮮魚を食べさせることを、店の呼び込みに行っているのである。旅先における鮮魚への執着は、時代が少し後になるが、幕末の尊攘派の志士として知られる清河八郎による旅日記『西遊草』のなかにも頻出する。八郎は庄内平野の東端にある農村の生まれで、さほど頻繁に鮮魚を口にできる土地柄ではなかったのであろう。東海道筋ではないが、越後の新津近くで鯛を賞味し、続けて鯛も大食して、「興に乗じてあまりくらいけるにや、終日胸中いたみ、大苦しみをなす」と、口にまかせて食べ過ぎる

とたいへんな目にあう、と苦笑している⁽¹¹⁾。

鮮魚を供する茶店は、さきにあげた『東海道名所図会』のなかの「薩埵嶺の栄螺・鮑」の記載をみると、「この茶店海岸に崖造りにて、富士を見わたし、海面幽邃にして三保松原手に取るごとく、道中無双の景色なり」とある。海を望む海岸壁から、三保の松原とさらに富士山を見渡すことができる景観もまた、この店の売物のひとつであった。雄大な景観を愛でながら、新鮮な海産物を食することができる茶店は、単なる移動としての旅に彩りを添え、旅のもつ意義を多様化させる装置であったといえる。

4 「歩く旅」を支えたもの

徒歩を基本とする当時の旅の疲労度が、おそらく現代の比ではなかったことは、旅人が残した多くの出納帳に、連日のように草鞋を買い求めた記録や、宿で按摩を頼んだ記録が頻出することからも十分うかがえる。本稿の最後に、こうした「歩く旅」に対して街道の茶店が果たした役割を再考してみたい。

「秋葉山中の茶店」、「藤枝瀬戸の染め飯」、「目川の茶店」、「草津の姥ヶ餅」に描かれた茶店での休息場面では、客の姿勢にひとつの共通するパターンがみえる。男性客の座り方で、草鞋履きのまま、片足を上げて組み、片足は下げた格好である。『東海道中膝栗毛』では、同様の姿勢を「おくざしきのゑんがはに、わらじのまゝあぐらをかき⁽¹²⁾」と表現する。この場面につけられた挿絵には、名所図会の絵と同じ姿勢で店の縁側に腰掛ける弥次・喜多が描かれており、茶店で休息する際にはお決まりの姿勢であったことがわかる。

文化7年（1810）の『旅行用心集』には、「道中にて草臥を直す秘伝并奇方^{めいほう}」として、「道中、茶屋にて休む節、草鞋のまゝにて足を下、腰懸べからず。其時ハ少シの間にて草鞋をぬぎ、上へあかり、急度かしこまり休むべし。草臥直ること妙なり」とある。挿絵に頻出する、草鞋のまま腰掛ける姿勢は、用心集のこの教訓にいささか相反することになるが、やはり実際にわずかな休憩時間では、わざわざ草鞋を脱ぐまでもなかったのであろう。そのかわり、

片足を上げて「あぐら」の姿勢をとり、休ませていると思われる。おそらく、片足ずつ交互にこの姿勢をとれば、かなり疲れもとれるのではないだろうか。

このほか、茶店での疲労回復に効力を発揮したと思われるものに、飲酒の習慣がある。街道の茶店で酒が供され、旅人がこれを頻繁に摂取していたようすは、さまざまな道中記や浮世絵などからもうかがうことができる。昼日中から茶店で酒を飲むことは、旅人にとって一般的であり、その背景には旅に出たことによる解放感や、旅そのものが祭りに準じるような非日常的な時空間であったことと関係している。

しかし、酒に含まれるアルコールには、陶酔をもたらすことで苦痛から解放するという、嗜好品に特有の作用がある。こうした物質は、文化史においては、まず聖なるものとして宗教的・祭祀的文脈のなかで用いられ、ついで医薬として用いられ、社会的意味をもつようになるとされる⁽¹³⁾。

前項でも参照した清河八郎の『西遊草』には、「酒肴を命じ、首尾よく山を越えたるを祝し、かつつれづれの鬱を払う」という記述がある。八郎は茶店や旅籠でじつによく酒を飲んでいるが、酒量そのものはさほどではなく、たいていが一杯、多くても宿でくつろぐ際に三杯程度である。雨に降られたある日、越後の三条に宿った八郎は、「それより一杯をかたむけ、こころよく臥す」と記しているが、長旅の疲れを癒すのに、ほんの一杯の飲酒がもたらす効果は、思いのほか大きかったのではないだろうか。

『旅行用心集』にも、道中での心がけとして、空腹のときに酒を飲んではいけぬ、飲むなら食後にせよ、という記述がある。また、「暑寒ともにあたたためて飲むべし」ともある。「富田の焼き蛤」の図には、燗酒用のちろりという酒器がみえるが、他の名所図会にも同様の図が数多く描かれており、温めた酒を飲むことが一般的であったことを裏付けている。このほか、焼酎についても、長雨の時や湿気の多い土地では少量飲むと湿毒（皮膚病）を払う効果があることや、極度に疲労したとき、足の膝下から足裏まで焼酎をふきつけるとよい、といった記述もあり、酒や焼酎に対する薬効が認識されていたこと

をうかがわせる。

街道の茶店は、旅人に対してじつにさまざまな便宜を提供してきた。冒頭でも紹介したドイツ人医師ケンペルの見聞録にも、「きれいに着飾った二、三の若い娘がいて、道行く人に呼びかけ、暖かい食べ物を愛嬌をふりまきながら客に差し出す。それで客は長い間待つ必要もなく、菓子とか焼物とか彼が求めるものをもらって、すぐにまた旅を続けることができる」とあり、旅を無事に過ごすうえで、茶店が欠かせない装置であったことを示している。

『東海道中膝栗毛』3編上の冒頭には、東海道の平和な旅のようすが、次のように記される。

「名にしおふ遠江灘浪たいらかに、街道のなみ松枝をならさず、往来の旅人、互いに道を譲合、泰平をうたふ。つゞら馬の小室節ゆたかに、宿場人足其町場を争はず、雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのづから独行し、女同士の道連、ぬけ参の童まで、盗賊かどはかしの愁にあはず」

多少の誇張はあるだろうが、大筋において江戸時代における日本の街道が安全であったことは、後に明治初年、東日本から北海道にかけて、通訳1人だけを連れて旅をしたイギリス人女性イザベラ・バードが、その手記に書いていることからもうかがえる。⁽¹⁴⁾バードは、行く先々で、プライバシーが欠如した日

本の旅籠や茶店の造りに失望しているが、街道に向かって大きく戸口が開け放たれ、多くの人々が絶えず出入りすることが、常に人の目にふれることにもつながり、逆に安全性を保持する結果となったとも考えられる。

『東海道名所図会』のなかの茶店の挿絵には、しばしば巡礼姿の女性や子供が描かれる。そしてこうした茶店と巡礼の組み合わせは、遍路と接待との関連を髣髴とさせる。実際に、江戸時代の伊勢参りには、60年に1度ほどの「おかげ参り」という群参現象が起きており、そのたびに身一つで旅する巡礼者と、彼らに対する駕籠や食べ物の施行が出現した。

信仰を誘因とする旅は、庶民の旅の原点でもある。近世後期の旅の大衆化は、信仰の旅を商業的で享乐的なものへと変えていったが、その本質はどこかで保たれていたのではないか。だれもが安全で平和な旅ができるよう、互いに自制し、保護しあう文化が育まれていたとするなら、近世の日本の街道は、世界でもまれな成熟した旅の文化を実現していたことになる。ここに描かれた茶店での飲食場面は、こうした近世日本における旅の平和を考える、ひとつの窓口ともなっているのである。

(やまもと・しの)

【注】

- (1) 道中記にみる参詣ルートの分析は、小野寺淳氏の一連の研究にくわしい。
- (2) 女性の旅日記の収集と分析は、柴桂子氏による一連の研究成果がある。
- (3) 板鼻の牛馬宿経営者金井忠兵衛が文政5年(1822)に書いた『伊勢参宮并大社拜礼記行』や、讃岐の砂糖商人が嘉永元年(1848)に書いた『伊勢参宮献立道中記』などがある。
- (4) なお、『東海道名所図会』には宿所での飲食場面は描かれていない。したがって、本稿でも旅籠等での飲食については言及しない。
- (5) 歌川広重の『東海道五十三次細見図会』の「藤沢」や、『東海道五十三次』行書版の「池鯉鮒」など。
- (6) 浅井了意(朝倉治彦校注)『東海道名所記』平凡社(東洋文庫)、1979年。
- (7) ケンペル(斎藤信訳)『江戸参府旅行日記』平凡社(東洋文庫)、1977年。
- (8) 江戸時代後期の江戸の生活文化を記した『守貞漫稿』には、食べ物に関連する「振り売り」とよばれる商いが、約50種類も載せられている。原田信男によれば、18世紀半ばの江戸は、町人の男が約31万人、女が21.5万人で、これとほぼ同数の武士を加え、総人口は100万人をゆうに超えていた。しかも男性の単身者が多いという特徴があり、外食産業が受け入れられやすい環境にあったという(原田信男『江戸の食生活』岩波書店、2003年)。
- (9) これに関しては、国立民族学博物館の共同研究グループが1983年から行った、現代日本人の食卓文化についての報告があり、明治から大正、昭和初期頃までの食生活においては、魚を食べることがきわめてまれであった実態が記されている(『国立民族学博物館研究報告別冊16号』1991年)。
- (10) 十返舎一九(中村幸彦校注)『東海道中膝栗毛』(新編日本古典文学全集81、小学館)より、4編上、二川にて。
- (11) 清河八郎(小山松勝一郎校注)『西遊草』岩波文庫、1993年。『西遊草』は、清河八郎が安政2年(1855)

に母親を連れて伊勢参りをした、全169日間の旅の記録。

- (12) 十返舎一九、前掲書、3編上より。
- (13) 小田晋「落語における飲酒と酩酊の構造」旅の文化研究所編『落語にみる江戸の酒文化』所収、河出書房新社、1998年。
- (14) イザベラ・バードの『日本奥地紀行』（高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、1973年）に、「私の心配は、女性の一人旅としては、まったく当然のことではあったが、実際は、少しも正当な理由がなかった。（中略）世界中で日本ほど、婦人が危険にも不作法な目にもあわず、まったく安全に旅行できる国はないと私は信じている」とある。

『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたち

中村 ひろ子

1 絵引と民具研究

本書『日本近世生活絵引』東海道編を使って近世の運搬のかたちを読み取ることが試みたい。原資料である『東海道名所図会』には当然のことながら街道を往来するヒトとモノの様が描かれているが、それはヒトとモノが運ばれる様でもある。そこで運ばれているのは旅の携行品であり、あるいは商品や生産物であり、また人そのものであるが、それらを運ぶのにどのような運搬方法と運搬具が用いられたのだろうか。

本書に収められているのは50枚弱という限られた図像であり、東海道という限られた地域のものである。しかし、そこに描かれている姿に『東海道名所図会』編纂当時の運搬のかたちが反映されるとみてよいとすれば、近世の運搬の一端が読み取れよう。

渋沢敬三は『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂に際し、「この仕事は民俗学の中でもマテリアルカルチャーの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる点でだれでもいいから一度は完成しておくと後から勉強する方々の助けになると思う」（『絵引きは作れぬものか』『日本常民生活絵引』第1巻）と記しているが、この絵引を活用した民具研究への期待に充分応えてきたとはいえないであろう。ただ、数少ない成果の一つといえるのが『日本常民生活絵引』から運搬方法の変化を探った萬納寺徳子「絵巻物よりみた運搬法の変遷」（『民具論集』4、慶友社、1967）であるが、近世の運搬を読み取る上でも有効な資料となろう。

また、この運搬は人々のくらしに欠かせない行為

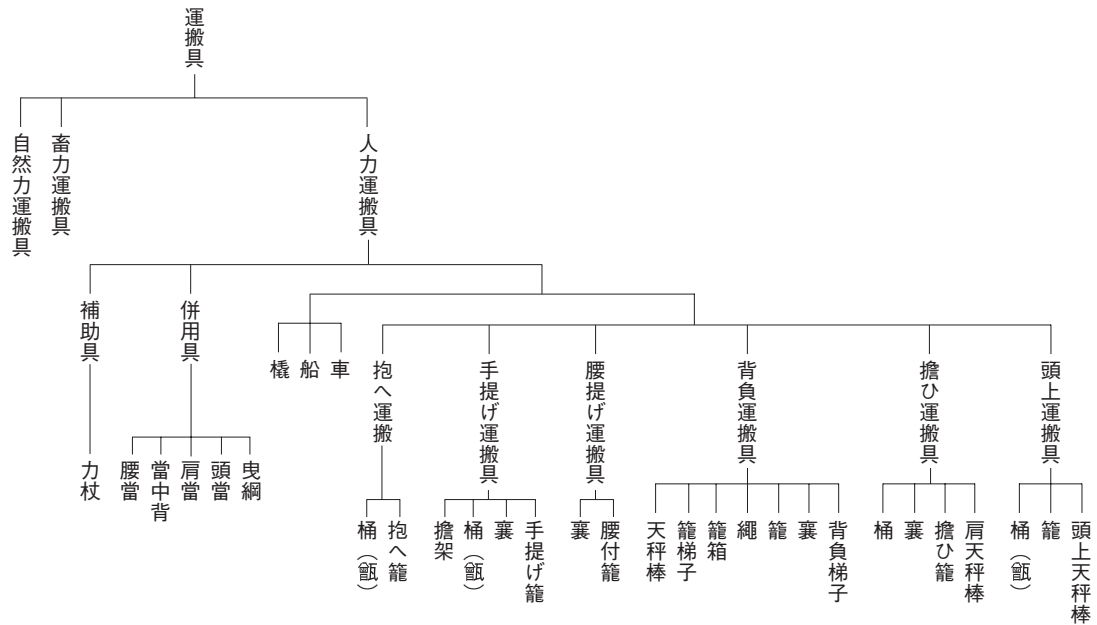
であり、多くは用具を伴うことから、その関心は民具研究の始まりとともにあり、渋沢敬三が主宰した日本常民文化研究所の前身アチックミュージアムにおける民具の収集と研究の当初からの中心課題であった。運搬法と運搬具の研究はこの運搬具の収集を通して進められたアチックの研究の進捗とともにあったといってよく、その後も民具研究のなかで蓄積のみられる領域である（木下忠「解説」『背負う・担ぐ・かべる』岩崎美術社、1989）。もちろん民俗研究にあっても一領域をなしており、今回の関心に限っていえば運搬の変化を跡付けた柳田國男の「棒の歴史」（『村と学童』朝日新聞社、1945、『定本柳田國男集』21所収、筑摩書房）が示唆に富む。

こうして、現存する運搬具を中心にした民具研究の中で明らかにされてきた運搬と『日本常民生活絵引』にみる中世の運搬、もしその間をつなぐものとして『日本近世生活絵引』東海道編から近世の運搬のかたちを提示することができるなら、それは渋沢のいう「マテリアルカルチャーの資料の一つとしてクロノロジーを明らかに」するながしかの試みになるのではないか。運搬への関心の中に絵引と民具研究、民俗研究が交差する可能性が見えるように思う。それはまた、本書の編纂に関わった者自らが本書を活用する試みにもなる。

2 『日本近世生活絵引』東海道編にみる運搬

絵引の有効性の一つは索引にある。絵引から運搬に関わる資料を得たいと思えばまず索引からの検索が考えられる。ただ試案本ということもあって本書の索引は『日本常民生活絵引』の「検索の便を考

表1 運搬具の分類 (磯貝勇「背負梯子について (予報)」)



えて、適宜引きやすい用語や上位概念にまとめる」(『日本常民生活絵引総索引』) ことまではしていないため、検索にあたっては、①担う、背負う、運ぶなどの運搬の行為、②頭上運搬、両掛け、振り分けなどの運搬方法の呼称、③天秤棒、背負繩、風呂敷などの運搬具、④扶箱、行李などの運搬のための容器、そして⑤角樽、鋏、槍などの運ぶモノ、というように運搬が描かれていると思われる項目を広く検索し、一つ一つ画像に当たり運搬方法を確認するという作業が必要であった。検索した事例を分類整理したが、用いた分類指標は先に紹介したアチックにおける研究の中心を担った磯貝勇が提示した分類である(「背負梯子について (予報)」『民族学年報』1、1938)。今回は変遷や地域性をめぐって論議のある頭上運搬 (具)、擔ひ運搬 (具)、背負運搬 (具) という3つの運搬法に絞ったが、運搬の全体像を見る上でも有効なので紹介しておく (表1)。こうして索引を分類して一覧したのが表2である (番号は本書のタイトル番号を示す)。

この索引一覧を一瞥しただけでも、担い運搬が数の上でも呼称やかたちにおいても多様で優位にあること、頭上運搬がほとんど見られないことが読み取れよう。そのかたちを見る前に先に紹介した『日本常民生活絵引』による中世の運搬を見ておきたい。

表2 『日本近世生活絵引』 東海道編にみる運搬一覧

A. 頭上運搬	18-4、34-15	
	天秤棒	35-21、37-23、38-36
	天秤棒を担ぐ	11-5、28-12、27-23、25-3
	棒手振り	18-5
	担い棒	13-18
	両掛け	3-16、8-12、9-25、15-23、35-16、39-9、41-19、44-15、45-15
	振り分け荷物	3-8、30-24、37-11
	肩に担ぐ	43-15
	風呂敷を肩に担ぐ	11-23
	山鴛籠を担ぐ	45-13
	刀を担ぐ	25-25
	荷を担いで渡る	8-15
B. 担い運搬	大布団を運ぶ	2-19
	角樽を運ぶ	36-3
	荷を4人で運ぶ	2-17
	サメを運ぶ	18-11
	扶箱	12-19、14-9、16-21
	長持	2-6
	行李	15-28、23-8
	風呂敷包み	22-25
	猪	1-9
	槍	2-13、7-8、8-7、41-21、45-8
	弓	8-8
	風呂鋏	43-18
	鋏	34-7
	鋤	34-7
C. 背負運搬	背負い繩	12-30
	背負い紐	37-2
	荷を背負う	45-11
	風呂敷包みを背負う	9-8
	風呂敷を担う	16-14
	風呂敷で担う	11-26
	莫産を丸めて担う	39-12
	風呂敷	2-18、3-7、38-43
	行李	37-13
	息杖	6-1、12-23
	息杖で荷を支える	37-3

表3 『日本常民生活絵引』にみる運搬法（萬納寺徳子「絵巻物よりみた運搬法の変遷」）

時代区分	運搬法	頭上		背負	かつぎ				馬	牛	牛車	計
		女	男		杵(一人)	杵(二人)	天秤	無道具				
平安時代末期	%	55.2		24.2		10.3		10.3				100
	例	15	1	7		3		3				29
鎌倉時代前期	%	16.5		44.4	18	6		4.5	6.8	3	0.8	100
	例	18	4	59	24	8		6	9	4	1	133
同後期～室町初期	%	14.6		23.8	32.1	2.3	3.6	13	8.3		2.3	100
	例	7	5	20	27	2	3	11	7		2	84
小計(例)		40	10	86	51	13	3	20	16	4	3	
合計(例)		50		86	87				20		3	246

3 『日本常民生活絵引』にみる運搬

萬納寺は『絵巻物による日本常民生活絵引』に使用された絵巻を、描かれた時代によって平安末期、鎌倉前期、室町の3期に分けた上で、①頭上（男・女）、②背負、③かつぎ（一人杵・二人杵・天秤・無道具）、④馬、⑤牛、⑥牛車に分類し、それぞれに描かれた頻度を件数という形で集計することにより（表3）、それぞれの時代における運搬法の優位と変化を読み取っている。何をもちて1件として集計したかの問題はあろうが、各絵巻に描かれた運搬のすべてを数え上げることの困難さを考えれば、切り取られた図像からなる絵引だからこそ可能だったのだといえよう。

この集計結果から萬納寺は「平安末期には女の頭上運搬が顕著で、鎌倉前期になると背負い運搬が多くなり、鎌倉後期から室町初期にかけてかつぎ運搬が目立ってくる。とりわけ一人杵が三分の一を占めることは注目される」と、背負い運搬から担い運搬への移行をみている。さらに近世前期の運搬についても『洛中洛外図』などを用いて集計し「江戸前期に挟み箱が現れ、かつぎ運搬の比率は高まり、背負は後退し」、「江戸前期までは京都付近においては頭上運搬がまだ一般的であった」ことを指摘している。

もう一つ興味深いのが分類である。民具研究の視点から儀具が「擔ひ運搬具」を「肩天秤棒・担い籠・囊・桶」に細分したのに対し、萬納寺は「かつぎ」として「一人杵・二人杵・天秤・無道具」と分ける。萬納寺の分類は運搬具を見ることなく絵引に描かれた運搬の形を整理するためのものである。肩

担い運搬には棒が使用されることが多いが、背負運搬が基本的に一人であるの対し、棒は二人以上でも用いられる。それが図からは見えるのである。また運搬具を用いない「無道具」も図からだからこそ見える運搬法であり、儀具の分類には登場しない。

もちろん儀具はこれらを充分承知の上で、収集した運搬具の分類を通してわが国の運搬方法の全体像をとの思いからの分類であろうが、モノから読み取れるものと、図像から読み取れるものとの違いの一つが見て取れる。

4 『東海道名所図会』に描かれた運搬

先の表2は『日本近世生活絵引』東海道編の索引を通して『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたちに行き着くことを試み、索引の表現を生かしながら頭上運搬、担い運搬、背負運搬という3つに分類した。ただ、そこから描かれた運搬の具体的な姿を捉えるのは難しい。

例えば同じ担い運搬といっても、棒を使うもの、直接担うもの、あるいは一人で担うもの、二人で担うものがあり、また「両掛け」「振り分け」といった当時の呼称で記されたものが、どのような方法であるかはわかりにくい。表2をこの運搬方法と運搬具の読み取りやすい形に再整理したのが表4である。また、先の萬納寺に倣って頻度、優位性を表す手がかりの一つとして本書の46場面のうちの該当運搬法が描かれている場面数を〈 〉内に示した。

表4『日本近世生活絵引』東海道編にみる運搬法

運搬方法		事例番号
A. 頭上運搬		<2> 18、34
B. 担い運搬 <41>	棒	杓（一人） <6> 12、14、16、22、36、46
		杓（一人・両掛け） <12> 3、8、9、15、23、25、35、36、40、41、44、45
		杓（二人以上） <3> 1、2、13
		天秤棒 <7> 11、18、25、27、35、37、38
	紐（振り分け） <3> 3、30、37	
	風呂敷 <2> 11、43	
	用具不使用 <7> 2、7、8、25、43、45	
C. 背負運搬 <12>	背負紐・縄 <5> 6、12、23、37、45	
	背負籠・箱 <1> 39	
	風呂敷 <6> 2、3、9、11、16、38	
計	<55>	

①頭上運搬

頭上運搬が運搬方法の中では早くに姿を消し、限られた地域や女性の行商・祭事・神事に残ったことが知られているが、ここでも一つは三島大社のお田打ちという神事に登場する。もう一つが日本橋魚市場内での魚の運搬に使われている例である。市場から外への魚の移動には天秤を使う姿が多数描かれており、ここでの頭上運搬が市場内という短距離の移動に天秤棒にさげるといふ手数をかけずに頭上に載せて移動するという簡便な方法としてあったことがうかがえる。

②担い運搬

描かれた運搬の多くが肩を使った担い運搬である。棒、紐、風呂敷を使うか、荷を直接担う方法を取るが、特に棒の使用が顕著であることがわかう。柳田はこの棒を「オコ・オーコ・杓」・「サス」・「天秤棒」の3つに分類しているが、見られたのは杓と天秤棒であり、棒の両端を尖らせて直接荷に差し入れるサスは確認できていない。

まず杓を一人で担う場合として、「両掛け」と呼ばれた棒の両側に行李や風呂敷包みなどに入れた荷を括りつける方法と、挟箱、風呂敷包みなどを棒の片側のみにつける方法とが見られた。ともに旅の定番ともいえる頻度で登場しているが、大きくて重い荷には2名あるいは4名、6名で杓の中央に荷を下げて移動する方法がとられており、長持、猪、植木

などをこの方法で運んでいる姿が見える。

もう一つの天秤棒は杓と比べる数は多くない。旅の携行品というより魚の運搬と行商に用いられていることが見える。少し時代は下がるが『守貞謄稿』には豆腐売、菜蔬売、花売、油売、鰻蒲焼売、甘酒売といったさまざまな行商人が天秤棒で商う姿が多数描かれているところをみると、数の少なさは町中ではなく街道を描いたものだからであるようにも思える。

このほか棒を使用しない担い方の一つが「振り分け」と呼ばれる荷造りした2つの荷を紐でつなぎ肩の前後に振り分けて運ぶ方法で、両掛けと比べ比較的少量で軽い荷に用いられている。また槍、刀、三味線といった長尺のものや布団、籠など容器不要なものは直接担っていることがわかる。

③背負運搬

背負運搬は、担い運搬に比べて使用例が少なく、背負紐を用いるか風呂敷を用いるかのどちらかであり、背負運搬具として記憶に新しい背負梯子や背負籠は確認できなかった。背負梯子が近世に存在したことは知られているが、先の礪貝も指摘するように「使用されたのは可成り近い時代ではなかったか」とも考えられよう。

これに対し背負紐は背負梯子や背負籠に比べ、荷のかたちや大きさにいかようにも応じることができ、背負いの基本ともいえるものであるが、描かれて

いるのは俵や梱包された重く大きな荷を背負った運搬を生業とする人々であり、荷の重さから息杖を使って立ったまま休息する姿である。また、風呂敷包みは柳田が「棒の改良」とともに近世が考え出した「手数が今までより少なく、効果が今までより大きい」と記しているが、確かに平結びして残る二隅を用いて背にかけるといった容器と運搬具をかねる簡便な方法であり、小さく軽い携行品に、とりわけ女性に多く用いられている姿がみえた。

以上、『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたちが、「頭上運搬はほとんど姿を消し、背負いに比して担い運搬の比率が高く、棒を中心に多様な姿をみせている」ことを見てきた。先に紹介した萬納寺の中世の頭上運搬から背負い運搬、かつぎ運搬への変化や、江戸前期にかつぎ運搬の比率が高まり背負いは後退した、という論に重なる結果といえる。この運搬方法の変遷については、早くから例えば「頭にのせることから、背に負うか、肩に担う方法へ移り……肩に担う方法が……一番多い」（安藤精一『講座日本風俗史』雄山閣、1960）などと語られてきており、柳田も先の書で「棒の発達は歴史としては新しい」「いろいろの新しい運搬方法を、近世は殊に頻繁に考え出して居た」としている。その意味では近世の図像資料から、その論証となる資料を提供したことにはなっただであろうと思う。

しかし、絵引編纂に携った宮本常一は、そこから「今も京都北方はカネル風習が見られるところであり、同じ地域に背負う風習も古くあったということを変遷と見るか、いろいろの運搬法が並存してきたとみるか……おそらくは並存」（『絵巻物にみる日本庶民生活誌』中央公論社、1981）、という読みとりを示しており、また木下忠の運搬の民俗地図編纂を通しての「日本全域が従来いわれているような一系列の変遷をたどったわけではなからう」（「民俗地図をめぐる」『民俗学評論』13）との指摘は民具や民俗資料が示しているところでもあり、『東海道名

所図会』に描かれた担い運搬と背負運搬を運搬方法の変遷という文脈の中で論じてよいのかの判断は難しい。近世に描かれた図像資料は豊かである。各地の資料との比較検討を待ちたい。

また、運搬は人々のくらしのあらゆる場面に関わる行為である。人はモノを移動する必要に迫られたとき、どのように方法を選ぶのだろうか。モノの形、大きさ、重さ、材質、あるいは移動の距離や地形、運ぶ人の性別や年齢、階層、運ぶ目的、時代や地域といったさまざまな状況の中で選択する。今回は『東海道名所図会』に描かれた多様な人々の選んだ運搬方法の紹介にとどまり、描かれた人や状況などからそのかたちを選ばせたものを読み取ることはできなかったが、そこに「文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる」だけでなく、「モノのみでは解りにくい」「モノのみからでは見えない」ものを見る図像資料の可能性があるように思う。

また、最初に述べたように本論は『東海道名所図会』に描かれた運搬のかたち」という表題であるが、直接『東海道名所図会』の全頁を読み取った結果ではない。あえて『日本近世生活絵引』東海道編を通して「東海道名所図会」に描かれた運搬に出会うという形をとった。絵引が他者による切り取りという選択を経た資料であるゆえに対象に近づくに有効な手がかりとなりえるという絵引の有効性の一つを再確認したいと思ったからである。しかし、今回は『絵巻物による日本常民生活絵引』とは異なり原資料に当たることが容易で、しかも1冊という量であったため、他者ではなく自ら運搬というテーマに沿って『東海道名所図会』から直接切り取ることとの比較に思いが及ぶ作業であった。あらためて、絵引という形で切り取られたものと切り取られなかったもの、特に切り取る側と利用する側にまたがることになった者としては、切り捨てたものとどう向き合うかという課題を再確認する試みでもあった。

（なかむら・ひろこ）